

私が教えられた 患者・利用者さんたち



新約聖書ルカ伝 15：4 『百匹の羊』より男と女一考

川本 愛一郎
（南リハシップあい）

今回の話は、筆者が訪問リハで担当している70代、男性との会話から考えさせられたことです。その方は、右片麻痺重度、構音障害、装具着用してT字杖歩レベル、ADLは左手ですべて自立されています。発病前は、画家だった父親の血を引いて、日本画を趣味とされていました。仕事は、技術者兼工業デザイナーとして、日本全国の商店街等の照明デザインや看板デザインをされていました。

訪問リハ時に、歴史の話や政治の話、宗教や教育の話などを熱くされます。ときには、訪問時間が会話だけで終わってしまうこともあります。

この方は、聖書にも造詣が深く、あるときに「先生、百匹の羊の話を知っていますか」と言われました。謎かけのように、「先生が荒野で羊飼いとて、百匹の羊を飼っていて、そのうちの一匹がいなくなったらどうしますか」と。

筆者は、「いなくなった一匹の羊はかわいそうなので探したいと思いますが、荒野は危険が多く残る九十九匹も大事なので、泣く泣くいなくなった一匹はあきらめると思います」と答えました。その方は、「私が羊飼いだったら、九十九匹を荒野に残して、いなくなった一匹を探しには行かない。男には、九十九匹を守る責任がある。しかし、女は、九十九匹をほったらかして、いなくなった一匹を探しに行く。これが男と女の違いだ」と言われました。この話は、筆者の心の中に澱のように溜まってしまい、日常の仕事や会合でいろいろな男性、女性と話をするとき、この人は『百匹の羊』の話にどう答えるのだろうか考えるようになりました。

この話の出典は、「あなた方のうち、百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹を失ったときに、九十九匹を荒野に残し、失われたものをみつけるまでそれを探しに行かない人がいるでしょうか」（新約聖書ルカ伝 15：



利用者様と日本画

4『百匹の羊』)です。これは聖書の教えとして一般的には、一匹の羊の命の尊さの話として理解されています。

最近、ある男性から私的なことで相談がありました。夫婦喧嘩をしまい、奥さんへの対応で戸惑っているとのことでした。筆者は、この男性に『百匹の羊』の話をしました。話しながら、少しずつ心の中で、九十九匹を守る男性的な考え、いなくなった一匹を追う女性的な考え、どちらも羊たちにとっては、「救い」なのではないかと思うようになりました。筆者の個人的な想いとしては、女性には、いなくなった一匹を嘆き悲しみながらも追い求めてほしいと思います。

一匹を追い求める女性の姿は、ほかの羊にとって、もし自分がいなくなったときも、同じように嘆き悲しみながらも追い求めてくれる存在として映り、救いと感じられるのではないのでしょうか。相談をしてきた男性には、男性にとっては小さな事柄と思えることも、女性にとっては大切なことであり、一匹の羊を追い求めるのが女性であり、みつけたときの喜びを、そしてみつけられなかったときの悲しみを共にわかち合える存在として、奥さんのそばにすることが大切なのではないかとアドバイスしました。

【かわもと あいichirou：1984年社会医学技術学院卒業。同年4月より出水市立病院勤務。1995年3月鹿児島県作業療法士会会長就任（～2005年5月まで）。1999年4月言語聴覚士国家資格取得。2004年2月（南リハシップあい設立）